

を多としたい。文書の内容に関しては、佐々木銀弥氏・脇田晴子氏ら商業史家によって広く紹介されているのでここでは繰り返さない。ただ、荏胡麻油の専売・自由通行の保証を、室町幕府は主として諸国の守護を介して指令したので、この文書には近江・摂津・播磨を初めとして豊富な守護関係文書が残されることになった。例えば、一一・一一・一一二各号文書と、『南禅寺文書上』所収長祿二年の幕府御教書を対照することによって、従来山名持豊が一円に守護権を有していたと見られていた播磨に於て、赤穂・揖西の少くとも両郡が山名是豊の分郡であったことが新たに判明する。(従って一一・一一・一一二号の山名持豊は是豊が正しい)

他に紹介者の遇目した若干の点を摘記しておく。九五号の細川九郎は、政元でなく勝元のミスと思われる。一一四号・一一六号はともに近江坂田郡守護京極持清の奉行人奉書で、前者の左側奉者は多賀昌宗、後者は下河原某および多賀高忠(『佐々木文書』『醍醐寺文書』ほか)に相違ない。ま

た一四八号は摂津西成郡守護細川政賢奉行入、一四九・一五〇各号は西成郡守護代各発給文書である(『尊経閣古文書纂所収飯尾文書』『大徳寺文書』前掲拙稿兵庫史学参照)。二〇八号の赤沢朝経は永正四年に死去しているので、本号は一五五号の前にならぶべき文書であろう。以上は、本文書の利用に際して少しでも便宜をと考えたまでの蛇足にすぎず、本書の史料価値にはなんの影響もないことをお断わりしておく。

最後に、望蜀を承知の上で今後の史料集編纂へのささやかな注文を呈することをお許し願いたい。本巻のように利用価値の高い史料集に、花押影の写真が付せられていないのは何とも残念で、惜しまれてならない。例えば『離宮八幡宮文書』の一四二号の花押は、これと宮内庁所蔵『壬生家文書』の内藤元貞遵行状・弓庭若狭入道打渡状の花押を対照して初めて丹波桑田郡代弓庭某の発給文書と判明するのである。従って一四二号の花押形状が不明である間は、同文書の利用は不可能に近い。結局、折角珠玉の史料集を手にしても利用に当っては

影写本を再点検せねばならぬという状況では、校訂者の労も充分には報われぬのではなからうか。特に本文書の如き、偽文書や写の存在を全く心配しなくてよい史料であっては猶更である。僅少の経費と労を惜しんで悔をあとに残されることのないよう、各地方史編纂の方に切望したい。

(A5判 五七八頁 図版六頁 一九七六年三月 島本町役場)

(今谷 明 京都大学研修員)

J・H・ブラム著 鈴木利章訳

『過去の終焉』

経済誌にはよく「イギリス病」という言葉が登場する。戦後最大の不況に直面して各国とも経済情勢は必ずしも良くはないが、中でも、英国では危機は経済のみならず、政治、社会の諸分野においても深刻なものであるという。その危機に直面した英国の知識人はどのように対応するのか、その一人歴史家J・H・ブラムの場合がここにある。簡単に内容を紹介しよう。

ブラムは過去 past と歴史学 history と

を区別する。ヘロドトスや司馬遷からマコーレーやスタップズに至るまでの歴史叙述は、支配階級の権威に奉仕し、それを強化するために過去を解説することであり、これは過去と呼ばれる。すなわち「過去とは、つねに、個人を抑圧したり、社会をある方向に動かせたり、階級を扇動したりするある目的をもって創られたイデオロギー」なのである（一〇頁）。

これに対して、歴史学の目的とは「人間を、個人の側面からと、その個人がこの時代の社会的な関連の中にどのように組み込まれていたかという側面から、理解すること」（二一九頁）、つまり「人間と社会についての真意を深奥まで汲み取ること」（三二一頁）であるという。

このような過去が終焉し、歴史学が興隆するのは、西欧における歴史学方法論の発展もさることながら、近代の科学革命、殊に二〇世紀の技術上の勝利 a technological triumph に依るところが大きい（一一一頁）と述べたあと、結論として、今日の歴史家は人類の真理のためにゆるぎない信念

をもち、過去の衰退を早め、歴史学をそのあとがまに据えるよう努めるべきだという（一七五頁以下）。

過去という術語を過去の事実という意味と、棄てられるべき特定の歴史観という意味とに二重に使用した点は紛らわしいし、技術革新への信頼からくる西欧中心の思考法も気になる。また一九世紀以前の歴史叙述がすべて権力に奉仕するためのものと断言し得るかなど、いくつかの疑問点はあがるが、何よりも気掛りなのは、二〇世紀の技術革新による伝統社会の崩壊という現実、果してプラムが考えているほど容易に、権力に奉仕するイデオロギーとしての過去を終焉させ得るものだろうかという点である。彼にとって過去に替わるべきものは人間尊重の歴史学の成立、言い換えれば人間解放の思想であろう。今日の英国が、技術革新の激しい潮流の中で、その伝統的優位性を失っていく現実を前にして、彼は却ってその潮流を是とし、それに乗ることによって人間解放を実現できるものと思ひ込もうとする。「できうるかぎり正しい、正確

な新しい過去が作り出されますよう祈る気持であります」（一八二頁）という結びの言葉は、彼の心情を痛いほどよく示している。過去の終焉に賭ける彼のオプティミズムは、自己を犠牲にして人類の将来を祈る自虐の裏返しに外ならない。しかし我々はむしろ、プラムをここまで追いこんだ産業社会の矛盾の深刻さにこそ思いを致すべきではないだろうか。

訳文は平明かつ流麗で、原文の格調をよく伝えているが、ただ一箇所一〇〇頁（原著六八頁）の「一キリスト教徒」は『天路歷程』の主人公クリスチャンかと思われるが如何であろうか。

（B6版 二〇四頁 索引一〇頁 一九七五年九月 法律文化社 一四〇〇頁）

（朝治啓三 京都大学大学院生）

アン・K・S・ラムトン著

岡崎 正孝訳

『ペルシアの地主と農民』

本書の発刊を知って最初に思ったのは、まさかこの本が日本語で読めるとは……と